「10年後もロンドンはアートとデザイン界の首都となりうるだろうか」と2人の建築家、トマゾ・ボアノとヨナス・プリモンタスは考えた。高騰する地価と教育費により、ロンドンはクリエイターにとって、住みにくい都市になっている。「ミニマ・モラリア」はそうした都市の現状に対するアンチテーゼとして2人が提案したプロジェクトだ。かつて、ロンドンには勉強や仕事のために、世界中からクリエイティブな人々が集まってきた。しかし、現在は働かなくても良いほど金銭的に余裕のある富裕層だけが、クリエイティブ産業に参入できる。そこで、社会的な地位とは関係なく、誰もがクリエイティブな活動をするためのスペースとして、彼らはコンパクトなモバイルスタジオを考えた。

スタジオは都市の中の空きスペース、例えば、公園やビルの屋上、共同または個人住宅の庭、駐車場などを一時的に利用することが想定されている。アーティストやものづくりの職人、デザイナーがワークショップを開催したり、住んだり、作業をしたりすることで、そこにクリエイティブなコミュニティーが出現する。ロンドンの住宅はバックヤードやグリーンスペースを持っていることが多いので、そうした使われていないプライベート空間をパブリックに開放する有効な活用法にもなる。

ユニットの面積は約4.2㎡。構造はスチールフレームを採用し、透明なポリカーボネート製の壁面は折り上げて、開口とすることができる。クリエイターの仕事をオープンにし、周囲とのコミュニケーションを促進するため、ミニマムで開放感のあるデザインになっている。道具や機材のための電源は、バッテリーを持ち込むか、ホストとなる近くの建物からケーブルを引き、借りることを想定している。また、気になる賃料だが、彼らは行政がスタジオを建築し、大家となるレジデンスに提供するシナリオを思い描いている。ただし、賃料には条件を付け、既存のスタジオの1/2〜1/3と低く設定するべきだと考えている。

今回、このプロジェクトは今年6月に開催された「ロンドン・フェスティバル・オブ・アーキテクチャー2016」の期間中、屋上公園に展示され、地元のアーティスト達が利用した。展示の後、行政、団体、個人から多数問い合わせがあり、共同開発に興味を持っているという。

トマゾとヨナスの2人は、大都市のアーティストが小さなスペースでも練習し、体験し、つくる場所を持てればと願っている。

FROM LONDON

都市のアーティストに向けたモバイルスタジオ

Minima Moralia

企画・設計／Tomaso Boano & Jonas Prišmontas

上、左下／「ロンドン・フェスティバル・オブ・アーキテクチャー2016」での展示の様子。スチールフレームは小学校で使われていた机から転用した　右下／クリエイターのオフィスやアトリエとしての利用を想定している

文／佐藤千紗　写真提供／Tomaso Boano & Jonas Prišmontas